



## 教科間の連携と高大連携

| 事例 | 連携内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 中3 | <p><b>課題研究</b>：核軍縮交渉ゲームを体験したあと、核軍縮をめぐる理想と現実について小論文を作成する。</p> <p><b>国語</b>：文献の探し方、引用の仕方、論理的な文章の組み立て方など、小論文作成に必要な作法を教授。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>高大連携</b>：作成した小論文は、広島大学川野教授に読んでいただき、表彰と講評を行っていただく。</li> </ul> <p><b>英語</b>：小論文に英語のサマリーをつける。</p> <p><b>公民</b>：核軍縮交渉ゲームのルール、状況説明、核軍縮のオプションなどを国際政治の分野と関連付けて教授。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>高大連携</b>：交渉ゲームの状況設定は、広島市立大学広島平和研究所の水本教授に監修していただく。</li> </ul> |
| 高1 | <p><b>課題研究</b>：個人（チーム）で国内外の社会課題をリサーチし、プレゼンテーションを行う。</p> <p><b>現代社会</b>：貿易ゲーム、ソーシャルビジネスプラン作成など、年間を通じた体験型授業で社会課題解決策を考察。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>高大連携</b>：ビジネスプラン作成にあたり、県立広島大学から助言をいただく。第一線で活動している方をゲストに招き講演会を開くことも多い。</li> </ul>                                                                                                                                                                                        |
| 高3 | <p><b>課題研究</b>：核軍縮交渉ゲームを体験した後、核軍縮をめぐる歴史と現状をリサーチし、小論文を作成する。</p> <p><b>現代文</b>：小論文の書き方について、改めて作法を教授。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>高大連携</b>：作成した小論文は、広島市立大学広島平和研究所の水本教授に読んでいただき、表彰と講評を行っていただく。</li> </ul> <p><b>英語</b>：小論文に英語のサマリーをつける。</p>                                                                                                                                                                                   |

いくつかの教科では、それぞれの学年の課題研究と連動するかたちで横断的な授業を展開している。その授業の中に、助言、監修、生徒成果物の審査というかたちで大学の専門家と協力し合っている。

このような取り組みは、生徒の思考・知識を有機的につなげるものであり、深い学びにつながる。しかし、課題も多い。まず、このような授業は担当者の個性によるところが大きく、組織的に教科横断的

に課題研究と連動した授業が始まったわけではない。有志で開始した取り組みが前例として蓄積され、徐々に定着しつつあるという段階である。連携教科が偏っており、数学・理科などのかかわりが薄いのも実情である。

高大「連携」を「接続」に発展させることも大きな課題である。SGH課題研究が始まったことで、大学の先生・学生と協力し合って学び合う機会が大幅に増加した。SGH指定を受けたことで大学からの注目度も高まり、本校に大学生を派遣したいという依頼も増えた。しかし、それらの多くが単発の授業や講演、小論文審査、ある単元の監修という「連携」であり、年間を通じて同じ生徒・学生・教員が継続的・定常的に学び合うプログラムは少ない。

## 有志活動、選抜授業と高大接続

「接続」と言えるほど濃密に高校・大学がつながっている成功事例は「ヒロシマ。アーカイブ」作成と選抜授業「Global Issues」である。

本校には有志の課外活動として「ヒロシマ・アーカイブ」を作成するチームがある。これは、被爆証言動画や写真をGoogle Earth上の現在・被爆時の広島の地図にマッピングしたアプリケーションである。制作は、渡邊英徳東京大学大学院教授（首都大学東京客員教授）・大学院生と本校生徒が共同で行っており、年間を通じて何度も直接ミーティングを重ねている。生徒たちは被爆者と信頼関係を築きながら証言を丁寧に記録、編集する。定常的に本校を訪れる渡邊教授らとともにPCを操作して証言をマッピングしていく。集めた写真はAIによる自動色付けを活用してカラー化し、より実相に近いかたちで記憶を継承していく。本校からも毎年東京研修



（研究室でプロジェクトに取り組む生徒の様子）

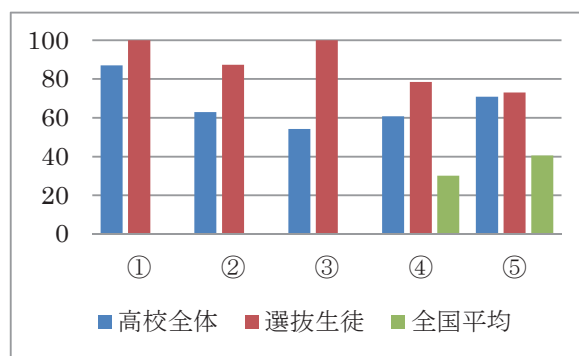


を実施しており、渡邊教授の研究室で最新の機器を操作しながら学生たちと共同作業を行っている。このチームに属している生徒は、活動を通じて非常に高い意識を持つようになり、グローバルな進路を選択する者や大学でも高校の課題研究の延長線上で専攻分野を選ぶ生徒が多い。

もうひとつの高大接続は「Global Issues」である。これは、高1～3までに開設している希望者選抜授業（20名前後 1単位）で、海外の大学で学んでいるような空間をめざしてデザインした。授業は、広島市立大学で核軍縮が専門のジェイコブズ教授が年間を通じて展開する。もちろんオールイングリッシュであり、エッセイ課題、文献読解、プレゼンテーションなども課される。授業以外にも、放課後は英語での言語活動やTOEFL対策授業に臨む。ジェイコブズ教授が毎週生徒たちを指導して下さることで、生徒の現状に合った授業展開が可能であり、徐々にレベルを引き上げてくださっている。年度末には英語で核軍縮交渉ゲームを行う合宿もある。このような濃密な大学レベルの学びを通じて、生徒たちの英語力はもちろん、自分から積極的に発言し議論を戦わせるなどマインドが育っている面も非常に大きい。これが、自己研鑽活動などへの参加率や投票率の高さなど、現実の行動変化につながっている。



（ジェイコブズ教授による授業）



#### H29年度の数値比較

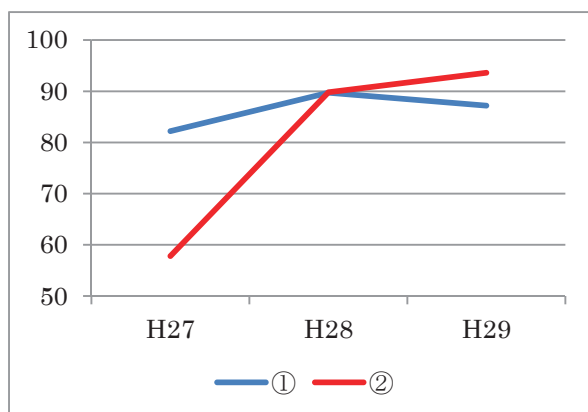
- ①以前より国際問題や多文化共生に興味をもつようになった(%)
- ②将来留学したり仕事で国際的な場で活躍したいと思うようになった(%)
- ③自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に参加した(%)
- ④私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない(%) (H26内閣府の調査と比較)
- ⑤2017年衆院選の投票率(%) (10代の全国平均と比較)

### 運営体制と教員の変化

新しいカリキュラムを作成し教育を実践するためには、教員集団の意識改革が欠かせない。従来本校では、平和・国際・人権の各校務分掌が独立していた。生徒を成長させたいと願いながらも、いつ、誰が、何を、何のためにしているのか共有し、教員の力を一体化させて発揮するシステムが存在しなかった。教育の刷新にともない、特色教育の開発・実施を一体的に行う新組織、グローバル教育推進部（以下GEC）を編成した。学校全体で各学年の成長目標・課題研究内容・授業手法を共有することができるようになった。GECは各学年に1～2名配置され、課題研究授業の教案を作成する。それ以外に、国内外研修の事前事後指導・引率を行う係、公文書を作成する係、留学支援係など、総勢約30名の教員で構成されている。課題研究は、中1から高3まで総合的な学習の時間（1単位）で行い、「Peace Studies」と呼んでいる。担当する教員はクラス担任である。

このような体制が通常授業の刷新にもつながった。課題研究の授業を主体的・対話的な構成で実施するようになったことが、課題研究以外の授業にも波及し、いわゆるアクティブ・ラーニング化が一気に進んだ。

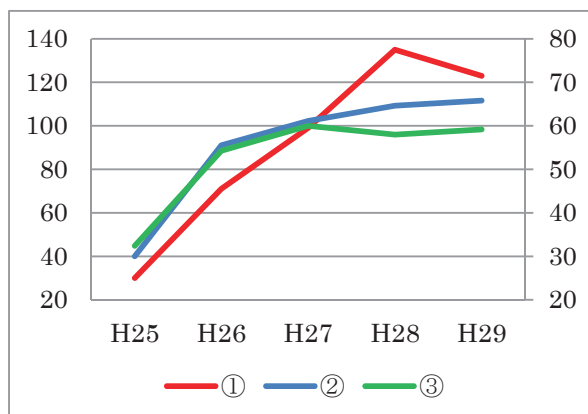
### 【教員アンケート結果抜粋】



- ①SGH諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導方法、内容に何らかの影響を与えた。(強くそう思う、そう思うの合計 %)
- ②SGH諸活動の計画立案や運営に関して、教員間での連携や協力関係が築かれていた。(強くそう思う、そう思うの合計 %)

## 生徒の成長・変容

アウトプット・アウトカムの指標や本校独自のアンケート結果からは、生徒のグローバル社会で活躍したいというマインド、行動の変容が見て取れる。

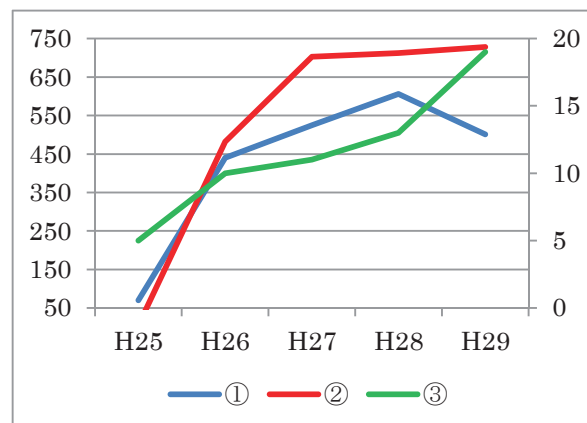


- ①自主的に留学または海外研修に行く生徒の人数(左目盛り)
- ②将来留学したり仕事で国際的な場で活躍したいと思うようになった(右目盛り)
- ③卒業時CEFR B1～B2レベルの生徒の割合(右目盛り)

海外研修への参加者数や英語力の向上の背景として最も重要なのは、「チャレンジしたい」という開かれたマインドの育成、意欲の伸長であると考えます。①③の基盤として、SGHの取り組みの中で②が年々伸びていっていることが大きな成果であると考え

えている。

このような意欲の伸長が、日々の課外活動・外部大会への参加者数の伸びにもつながっている。③は結果として伸びているが、①②の大幅な増加が生徒の開かれたマインドの形成を示している。



- ① 自主的に社会貢献活動または自己研鑽活動に取り組む生徒数(人、左目盛り)
- ②グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数(人、左目盛り)
- ③ ②における入賞者数(人、右目盛り)

## 今後の課題

現在直面している課題は、2019年度SGH指定明け以降の教育ビジョンを確立することである。SGH指定期間が明けた2019年度以降の教育ビジョンをどう策定するか。本校では、2年目が終わった2016年度より、指定明けのグランドデザインを考える校務分掌が設置された(現在、教育構想検討委員会という名称となっている)。SGH事業の何を残すか残さないか、何が成果で課題であるのかを個別に検討するよりも先に、どのような理想を掲げてこれからの本校の教育をつくっていくのか、そのビジョンを教員の協働で作成しかたちになりつつあるところである。現在、大学が策定している3つのポリシー(アドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー)とキーコンピテンシーを本校でも作り上げ、どのような生徒を育成したいのか明確になりつつある。ここから、具体的なカリキュラム作りに入っていくところである。